

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02367

研究課題名(和文) インドネシアにおけるシティズンシップ教育の多角的・包括的研究

研究課題名(英文) Comprehensive multi-dimensional study on citizenship education in Indonesia

研究代表者

中矢 礼美 (Nakaya, Ayami)

広島大学・人間社会科学研究科(国)・准教授

研究者番号：70335694

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1)大学のサービスマーケティングを通じたシティズンシップ形成の特徴として、大学生は地域開発に地域住民と取り組む相互エンパワーメントを通してローカルシティズンシップを育む可能性が高いこと、2)高等学校段階国際教育プログラムにおけるシティズンシップ教育では、新植民主義的であり、コスモポリタン化に課題があること、3)高等学校段階国家カリキュラム・教科書にみるシティズンシップ教育には国家プライドの強調、グローバル課題解決能力育成、新自由主義・新植民主義、若者のコスモポリタン化批判が特徴的であること、4)5地域におけるシティズンシップには違いが生まれていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

途上国におけるシティズンシップ教育研究は非常に限られており、脱植民主義的な視点から検討する研究が最近の国際的動向としてあるが、歴史的・包括的に1国のシティズンシップ教育を明らかにするものはほとんど見られない。

本研究では、独立以降のカリキュラムについてシティズンシップ教育の観点から特徴を明らかにしたうえで、事例研究として高等学校(通常の学校と国際教育プログラムを導入している学校)の特徴と地域別特性、大学のサービスマーケティングを通じた新しいシティズンシップ教育の動向と課題を明らかにしている。これらの知見は我が国のシティズンシップ教育を多角的、多面的に再考する知見を提供している点で、社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：In this study, we found that 1) university students are likely to develop local citizenship through mutual empowerment to work with local residents for community development as a characteristic of citizenship formation in university service learning, 2) citizenship education in international education programs at the high school level is neocolonialistic and has issues of cosmopolitanization, 3) citizenship education in national curricula and textbooks at the high school level emphasizes national pride, fosters global problem-solving skills, and criticism neoliberalism and neoliberalism.(4) We can see the differences have emerged in citizenship in the five regions.

研究分野：比較教育学

キーワード：インドネシア シティズンシップ アイデンティティ 社会貢献意識 国際教育 地域特性 サービス  
ラーニング

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

インドネシアは、主要な新興国の中でも経済成長が際立ち、日本を含め海外企業も事業展開を加速させている。地域間・社会階層間格差といった国内問題に加え、経済、情報の面でグローバル化の強い脅威にさらされている。その中で、国家の安定と開発にむけた人材育成、特に社会への帰属・貢献意識、社会形成・参画力を形成するシティズンシップ教育には大きな役割が期待されている。そこで生まれた学術的「問い」は、インドネシアは「グローバル化の影響を受けてさらに多様化する価値観の中で、個人、地域、国家、グローバルといったシティズンシップ教育の多次元性の調整をいかに図ろうとしているのか」であった。

開発途上国でのシティズンシップ教育の課題は、先進国とのそれとは遥かに深刻で喫緊の課題である。なぜなら、国家開発、人間開発のためには社会形成や社会参画の力を育成することが強く求められるにも関わらず、民主主義的な国家の形成進や政治に参加する力は国家・社会の安定につながらないという矛盾が存在しているためである。また、教育予算の制限も著しく、教育システムの整備も遅れ、教育人材(カリキュラム開発者、教科書作成者、州・県・郡教育事務所職員、教師)の不足および能力の低さがすべての教育にとって大きな障害となっている。さらに、インドネシアについてみれば、1万3千島に2億6千人、350の民族が存在し、大きな経済的社会的格差、地域間、学校間の教育格差が顕著である。最低限の教育を受けるのみで第一次産業に就く人口が多い一方で、IT企業、海外企業を目指す高学歴者も約1割存在する。そして、私立学校を中心に国際教育プログラムが導入され、国立学校でも元国際水準学校に認定された学校は教育の国際化に力を注いで集客を図っている。固定電話のない辺境地であっても、メディアの影響は大きく、携帯電話、ネット普及による文化への悪影響へ神経質な反応として伝統文化への回帰現象も起こっている。その一方で、グローバル経済に打ち勝つために英語教育、留学支援も日本を遥かに上回る予算とプレッシャーで広がっている。州レベルでは、地域の伝統回帰にその打開を託すところもあるが、果たしてその効力はいかほどであるのか。これらの問題は、実は本質的には先進諸国にとっても多くの示唆を与えるものである。

## 2. 研究の目的

本研究では、インドネシアが1)新しい世代(個人主義志向、バーチャルコミュニティ形成)と社会変化(民主主義)に対応するために国家はどのようなシティズンシップ教育を開発実施しているのか、2)州・学校レベルでは地域開発を進めるためにどのようなシティズンシップ教育を開発実施しているのか、3)国際教育プログラムはグローバル化による価値観の変容、経済競争への参戦、持続可能な開発にどこまで対応しているのかを多角的・包括的に明らかにする。

特に、国内の経済・社会格差別と同時にナショナル、ローカル、グローバル化への対応という多次元のシティズンシップの調整の難しさに注目して、地域別や学校種別(国立・私立あるいは国際バカロレア)によるシティズンシップ教育の特徴、課題および可能性明らかにする。

## 3. 研究の方法

研究は大きく三つに分けられ、それぞれの方法は以下の通りである。

### 1) 大学のサービラーニングを通じたシティズンシップ形成の特徴と課題

研究技術高等教育章による法令やガイドライン、大学HP上のサービラーニング情報、学生による報告書・ビデオクリップ、新聞記事、インドネシア研究者による先行研究、西部1校、東部1校を事例とした半構造化インタビュー(各大学8名ずつ)を実施した。

### 2) 国際教育プログラムにおけるシティズンシップ教育・成果の特徴と課題

独立以降のカリキュラムをシティズンシップ教育の視点から分析してその特徴を明らかにし、事例研究として首都ジャカルタにおける国際バカロレアカリキュラムを導入している高等学校1校と古都ジョグジャカルタにおけるケンブリッジカリキュラムを導入している高等学校1校において授業観察、教員・保護者・生徒らへの半構造的インタビューを実施した。

### 3) 高等学校段階国家カリキュラム・教科書にみるシティズンシップ教育の特徴

高等学校のパンチャシラ公民教育と社会学のカリキュラムおよび教科書について、シティズンシップ教育の視点からその特徴を分析した。

### 4) 5地域におけるシティズンシップ教育・成果の特徴と課題

5地域(マルク州アンボン、西カリマンタン州ポンティアナック、ジャカルタ、西ジャワ州・ブカシ、ジョグジャカルタ)における高校において、アンケート調査、授業観察、およびインタビュー調査を行った。これらの地域を選択した理由は、各地域の歴史的社会的特徴による。アンボンは開発の遅れた東部にあり、宗教抗争を経験しており、ポンティアナックは西部ではあるがやはり開発の進んだジャワ島外に位置し、民族抗争を経験している。ジャカルタは首都で、ブカシはジャカルタに隣接する工業都市である。ジョグジャカルタはジャワ島中部に位置し、歴史、文化、教育で有名な古都である。調査対象の高校はブカシを除いて国立学校であり、教育内容と水準に大きな差はない。

アンケート調査は高校第2学年を対象とし、回答者数は計1053名であった(男子441名、女

子 609 名) 調査方法は、発表者が教室にて調査目的と回答方法を説明した後、その場で記述してもらい(無記名) 直接回収を行った。調査時期は 2018 年から 2020 年である。調査項目は、属性、自己への影響、メディア利用、学校外活動、地域活動、地域への愛着・誇り・理由、社会問題意識、社会問題をめぐる教育・行動・意識、国家愛・誇り、就職理由・貢献意識からなる。社会貢献意識は、「地域問題の解決に貢献したいか」と「誰・何のために働きたいか」という設問によって探ろうとした。後者の選択肢としてはグローバル社会・国家・地域・家族・給料・賞賛・プライドを設定し、5 件法を用いた。また、各学校においてパンチャシラ教育および社会学の授業を参観したのちに教員に半構造化インタビューを各 1, 2 名ずつ行った。また生徒に対しても各校 8 - 10 名ずつ半構造的インタビューを行った。

#### 4. 研究成果

研究成果は、以下、4 つに大きく分けられる。

##### 1) 大学のサービスマーケティングを通じたシティズンシップ形成の特徴と課題

歴史的には主要大学のパイロット的活動を通して、サービスマーケティングの運営形態、内容、方法が確立されてきたが、それをもとに政府はガイドラインを作成し、競争的資金プロジェクト、質保証制度、国家的サービスマーケティングプロジェクトを展開し、国家のコントロール力を高め、ナショナリズムの高揚につなげている。一方で、各大学はそれぞれの経営方針、運営能力、学生の志向性から、インターンシップや教育実習を含む多様な形態のサービスマーケティングを実施していることが明らかになった。サービスマーケティングに期待される機能は、国家的に推進されるものは建國・国家開発貢献としての支援活動から、地域と相互エンパワーメントによる地域開発「協働活動」へと変容してきており、大学生と地域住民の人材育成による持続可能な地域開発に向けたシティズンシップ教育の機能を果たすという特徴を示していることが分かった。

学生の視点からみる機能としては、キャンパス内では到底実感しきれない地域開発の複雑さ・困難さ、包括的アプローチの必要性や経済的な価値以外の地域開発の在り方を認識し、地域の人々からの大きな期待を受けて自己の能力を最大限に発揮しようとした自己成長を認識できていた。ただし、このような越境学習の効果は全員の学生が経験できるわけではない。サービスマーケティングを支える大学の教育・予算・組織間のコミュニケーション、受け入れ地域の社会文化的状況と大学生への期待、また学生と地域の親和性、大学生の活動の中での役割、志向性の違いによって期待するような機能が果たされないことがわかった。

##### 2) 高等学校段階国際教育プログラムにおけるシティズンシップ教育・成果の特徴と課題

国際カリキュラムの導入は、愛国心を強く持ちつつ、グローバル競争に打ち勝つ力を持つ人材を育成することにその特徴がある。国内大学進学を目指すには、IB だけでなく国家ナショナルカリキュラムも並行して学習し、通常の状態共通テストを受けなければならないシステムを保持していることから理解できる。保護者は、社会的地位の向上を目的として子弟を通わせていることから新自由主義的傾向の強まりが見え、一方で、一定数が子弟のアイデンティティの歪みや揺れを心配していることが分かった。また、生徒のインタビューからは、ローカルシティズンシップとのバランスは、教授言語が英語のみに特化されない場合には保たれ、言語や教育環境が地域的文脈と切り離されている学校ではコスモポリタン化現象を起こしていることが分かった。

##### 3) 高等学校段階国家カリキュラム・教科書にみるシティズンシップ教育の特徴

独立以降の高等学校段階のカリキュラムは、国民形成のために強いナショナルシティズンシップ教育が実施されていたが、2000 年以降は地域開発を志向する人材育成のためにローカル化も意識し始め、またグローバル化への対応として国際社会の中でのインドネシアの役割として国家プライドの強調やグローバル化の功罪として新植民地主義、コスモポリタリズム批判が協調され、経済的にはグローバル競争に打ち勝つ能力の大切さと同時にグローバル課題解決能力育成にも注力し、ローカル・ナショナル・グローバルなシティズンシップの調整を図ろうとしていることが明らかになった。

##### 4) 5 地域におけるシティズンシップ教育・成果の特徴と課題

インドネシアはこれまで愛国心教育が盛んで、ナショナルアイデンティティが他国と比較して非常に高いことで知られてきた。本研究でも確かにナショナルアイデンティティの高さは同様に示されたが、同時に地域別に異なる特徴を示していることも明らかになった。観光地・地方都市の方が国家および地域への貢献意識が高く、都市部の方が国家・地域への貢献意識は低く、他地域や他国への興味関心が高く、自己達成意識が高いことが明らかになった。

以上を総合して、インドネシアのシティズンシップ教育は、従来の強いナショナルシティズンシップからローカル・グローバルレベルのシティズンシップ教育へと変化しており、地域開発を進めながら国家開発問題とグローバル課題を解決しようという展望を持つ若者の育成へ大きな可能性を示していることが分かった。またそこには課題としてコスモポリタリズムや新植民地主義の課題が残っていることが明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 中矢礼美	4. 巻 59
2. 論文標題 インドネシアの大学におけるサービス・ラーニング Kuriah Kerja Nyata (KNN) の制度化の特徴と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較教育学研究	6. 最初と最後の頁 139 - 159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5998/jces.	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Arfani, J. W., & Nakaya, A.	4. 巻 18 (3)
2. 論文標題 Meanings of international high school education in Indonesia and Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Research in International Education	6. 最初と最後の頁 310-325
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/1475240919890223	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Arfani, J.W. and Nakaya, A.	4. 巻 15 (1)
2. 論文標題 Citizenship education in Indonesia and Japan: A Dynamic endeavour to form national character	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Citizenship Teaching & Learning	6. 最初と最後の頁 45-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1386/ctl_00019_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 中矢礼美	4. 巻 59
2. 論文標題 大学のサービス・ラーニング 特集の趣旨	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較教育学研究	6. 最初と最後の頁 94 - 99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5998/jces.	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原章正・中矢礼美	4. 巻 78(6)
2. 論文標題 テクノロジー・シティズンシップ教育カリキュラムの開発と検証 - 技術倫理の醸成と弁証法的リスクコミュニケーション力の育成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 土木学会論文集D3(土木計画学)	6. 最初と最後の頁 11_812-11_825
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.2208/jscejipm	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 3件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Ayami Nakaya
2. 発表標題 Global Citizenship Education in Social Studies in the Era of the New Normal
3. 学会等名 (5th International Seminar on Social Studies and History Education(招待講演)(国際学会))
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ayami Nakaya & Akimasa Fujiwara
2. 発表標題 Designing Technological Citizenship Education in Japan and Indonesia
3. 学会等名 the Comparative Education Society of Hong Kong (CESHK) 2021 Conference(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中矢礼美
2. 発表標題 インドネシアの高等学校におけるグローバル・シティズンシップ教育
3. 学会等名 日本カリキュラム学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中矢礼美・劉国彬
2. 発表標題 インドネシアにおける華人系大学の特徴
3. 学会等名 アジア教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ayami Nakaya
2. 発表標題 Peace Education in Japan: From Anti WAR/A-bomb education to Global Citizenship Education
3. 学会等名 International Conference on Peace Education, Bandung-Indonesia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ayami NAKAYA
2. 発表標題 Curriculum Management System for Sustainable Local Development
3. 学会等名 International Conference on Research of Educational Administration and Management (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 中矢礼美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学术研究出版	5. 総ページ数 286
3. 書名 国際教育開発入門	

1. 著者名 中矢 礼美、西野 節男、近藤 孝弘	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 368
3. 書名 地域研究：多様性の教育学へ	

1. 著者名 中矢礼美「5章 インドネシアの才能教育」93-111頁、山内乾史 編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 344
3. 書名 才能教育の国際比較	

1. 著者名 中矢礼美「第3章 エスノグラフィーの研究・スキル」28-39頁、山内乾史 編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 152
3. 書名 若手研究者必携 比較教育学の研究スキル	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

インドネシア	ガジヤマダ大学			
--------	---------	--	--	--